

Geology of the Northeast coast of Kagoshima bay, HUMOTO tuff in particular . Geology of the Northeast coast of Kagoshima bay, HUMOTO tuff in particular .

中野 真帆^{1*}, Kimihiko Oki²

NAKANANO, Maho^{1*}, Kimihiko Oki²

¹Graduate School of Science, Kyoto University, ²Kagoshima University museum

¹Graduate School of Science, Kyoto University, ²Kagoshima University museum

鹿児島湾奥部沿岸の北部一帯には、第四紀の海成堆積物である国分層群が分布している。国分層群は全体として一連の堆積物であるが、水中火砕流堆積物によって三つの堆積層(加治木層・蒲生層・隼人層)に分けられている。本調査地域は、鹿児島湾奥部沿岸の北西部にあたる吉田町東部である。本調査地域には国分層群の中でも蒲生層より上位の層が分布しているが、各層の側方変化が激しい上に本調査地域にしか分布しない凝灰岩がいくつか存在している。その中でも淘汰が良く細粒砂～極細粒砂で白色火山ガラス質の麓凝灰岩部層は非常に特殊な層である。本研究の目的は、本調査地域での国分層群の層位関係を再検討することと、麓凝灰岩部層の堆積環境を明らかにすることである。調査では、火砕流堆積物を対比するために重鉱物組成を調べ、麓凝灰岩部層は一定間隔でサンプルを採取し粒度組成を調べた。今回の調査で、麓凝灰岩部層は小田火砕流より上位になることが確認された。また、麓凝灰岩部層の分布高度は南東から北西に向かって低くなるため、麓凝灰岩部層は北西方向に低くなる盆地状の地形に堆積したと考えられる。粒度組成は全体でわずかに上方細粒化する傾向が見られることから、分級作用を受けたことが分かる。

堆積構造を調べると、麓凝灰岩部層の中部には、西から東への流向を示すカレントリップルがみられ、上部には、微細な米粒状の水抜け構造が見られた。このことから本部層中部まではある程度停滞し流れのある状態であったが上部は比較的急速に堆積したと考えられる。麓凝灰岩部層と隼人層との境界は乱れており、一部の露頭ではクラスティックダイクが上がっている。したがって、本部層が堆積した直後に地震のような大きなイベントが起こったと考えられる。

キーワード: Fumoto tuff, Environmental of deposition, Kokubu Formation

Keywords: Fumoto tuff, Environmental of deposition, Kokubu Formation